

國學院大學学術情報リポジトリ

井上順孝先生退職記念講演会「現代宗教のリバースエンジニアリング」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000515

井上順孝先生退職記念講演会 「現代宗教のリバースエンジニアリング」



國學院大學神道文化学部教授、研究開発推進機構機構長、そして日本文化研究所所長である井上順孝先生は、2018年3月31日をもって國學院大學を退職されることとなった。2018年3月10日、國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホールにて、井上先生の退職記念講演会が開催された。

井上先生は1948年に鹿児島県に生まれ、1971年に東京大学文学部宗教学宗教史学専修課程を卒業された。1974年から同大学文学部の助手を務められたのち、1982年に國學院大學日本文化研究所の講師に就任。1992年には同研究所の教授となり、2002年に國學院大學神道文化学部教授に就任。2006年以降は日本文化研究所の所長を務められ、2007年には國學院大學研究開発推進機構の副機構長、2013年には同機構長に就任された。

学会活動においても、1995～1997年に「宗教と社会」学会の会長、2011～2014年に日本宗教学会の会長を務められるなど、多くの重職を歴任。また1998年から（公財）国際宗教研究所宗教情報リサーチセンターのセンター長、2017年から宗教文化教育推進センターのセンター長を務めるなど、研究成果を社会に発信する多彩な活動も行ってこられた。

ご自身の研究活動においても、『教派神道の形成』（弘文堂、1991年）や『新宗教の解説』（筑摩書房、1992年）といった多数の著作を刊行され、さらに『日本型政教関係の誕生』（共編著、第一書房、1987年）、『新宗教事典』（共編著、弘文堂、1990年）、『神道事典』（共編、弘文堂、1994年）、『〈オウム真理教〉を検証する』（責任編集、春秋社、2015年）といった共同研究の成果も世に問い、宗教研究の新たな可能性を切り拓いてこられた。

最初に井上先生は、宗教的な環境に生まれ育った時から「宗教とは何か」という問いを一貫して持ち続けてきたと述べた。先生の研究は多岐にわたっているが、そのすべては現在の考えにつながっているという。先生は講演のテーマを、「コンピュータ技術やコンピュータサイエンスに下支えされた最近の脳科学や進化心理学、進化生物学といった諸分野で生まれている新しい研究フレームが、人文系学全般に及ぼしつつある影響に触発されての、宗教研究のこれからの課題についての私見—これまで調査を重ねてきた現代宗教のありようから得られた知見を出発点に据えた場合の展望—」と説明し、まずご自身の研究の歩みを振り返った。

Part I 「研究の的を見切れていなかった時期」

1970年代頃は様々なテーマに取り組んだが、何をやりたいかなかなか見つからない時期だった。しかし共同研究で現地調査に行ったことが転機になった。特に奄美の調査ではインフォーマントの語りの多層性・多面性に気が付いた。宗教の中心部に入っていくと、

その人の人生の根幹にかかわるため、表層的な調査ではわからないことがあることを痛感したという。他方、修士課程で取り組んだ平田篤胤などの思想の研究には限界を感じ、宗教社会学や実態調査へシフトしていった。

Part II 「資料・データと向かい合う」

1980年代半ば頃から國學院大學の日本文化研究所に所属し、個人的には教派神道の研究を進める一方、共同研究にも取り組み、1990年代にその成果を発表していった。

90年代は世界的にも国内的にも、情報化やグローバル化をはじめとする様々な変化が起こった時期だった。先生ご自身も1993年の「宗教と社会」学会の設立に関与し、20年にわたる学生宗教意識調査を立ち上げ、90年代後半には宗教教育プロジェクトを国際的に展開した。さらに1995年のオウム真理教による地下鉄サリン事件を受けて、宗教情報リサーチセンターを開所するに至った。

このような転換点を経て、研究をしていく上での二つの境界線を意識するようになったという。一つは「視野に収めるべき境界線」、すなわち宗教研究、あるいは「宗教」に含まれる領域の範囲である。もう一つは「攻防を意識しなければならない境界線」であり、カルト問題やイスラムフォビアなど、宗教に関して憂うべき状況が出現している現在では、社会に向けて注意を喚起していくことが必要なのではないか、ということである。

Part III 「なんとなく見えてきた」

以上の歩みを経て、特に2000年代に入ってはっきりと気付いたことは、社会、文化としての宗教の研究を深めるには、1990年代の「脳の10年」に代表される人間研究の新しい領域、すなわち「脳認知系研究」（進化生物学、進化心理学、認知心理学、脳〈神経〉科学……）に目を向けなければならないということだったという。

脳認知系研究の潮流は宗教研究の枠組みを大きく揺るがすものであるが、逃げずに正面から受け止める必要がある。それは人間を知らず知らずのうちに動かしている「無意識」の領域を明らかにし、現代宗教にまつわる難問を解明するための手がかりを与える。先生はその方向性を「現代宗教のリバースエンジニアリング」として提示した。

現代宗教のリバースエンジニアリングへ

「リバースエンジニアリング」とは、できあがったものからそれがどうできたか、元をたどっていく方法を指す。宗教研究においては、宗教史に関する研究の蓄積をふまえ、脳認知系の研究を参照するベクトル合成的試みが可能なのではないかという。

脳認知系の研究を意識したベクトルは、脳内に組み込まれた2種類の機構という観点として説明できる。それは遺伝子が主役となる「生得的」側面と、成長の過程で環境との相互依存関係の中で形成された認知フレームが主役となる「習得的」側面として説明できる。この二つは相互に関係し、ときに補強したり対立したりする。この二つの機構に関する脳認知系研究の成果を、宗教史の豊富な素材に応用していく可能性を先生は示した。

その背景には、専門的研究分野が細分化したために、様々な研究をつなぐことが求められている現代の状況がある。スモールワールドやミトコンドリアDNAのハプログループのトポグラフィーが示しているように、タイトなグループを作る人とグループをつなぐ人の両方が大切なのであり、全体としては宗教研究もそのような形になっていくと良いのではないか、と先生は提案された。

最後に研究を共にしてきた方々への感謝の思いを述べ、これからもご自身の研究は「終わらない」ことを宣言し、井上先生の最終講義は盛会のうちに幕を閉じた。

（齋藤公太）